特 2493
599

昭和二年七月

東京帝室博物館案内　繪畫部

始

特299
599

東京帝室博物館案内　繪畫部

（昭和二年七月）

寄贈本

第二室

この室に陳列するは所謂大和繪に屬するものである。大和繪とはその名の示す如く日本固有の繪の謂ひである。日本の文化を概觀するに飛鳥朝以來支那の感化最も多く、繪畫の如き殆んどすべて彼土に淵源するとも言はれるが、平安朝も半頃以來は自ら日本固有の趣味が浸漸し來り、禮拜の對照として畫家の自由を許す餘地の少ない佛畫に於いてさへその相好裝飾に國風を發現するに至つたのであるから、當時の風俗を取扱つた繪畫に於いて一層自由に支那藝術を變じて日本趣味を發揮するやうになつたのも當然で、その題材は云ふに及ばず、題材に適はしく引目鈎鼻の描法や厚く顏料を重ねるかきおこしの手法や、輕妙清洒な筆の運びや、更にはこれが繪卷形式の中に特殊な發展をなすに至つては全く支那風を脫しておのづからこれ日本固有の大和繪の境地を確立するに至つたのである。これが藤原末季より鎌倉期を通じて最も發展をとげ足利

期に入つてもこの傳統を提げて榮えてゐるが鎌倉期程の盛運を見ず、その後桃山德川と時代の歩みを進めると共におのづから流派化せられて所謂土佐派住吉派の名を以てよく他の諸派と相並びひとり平安朝以來の題材や描法のみといはず又自ら固有の趣致を發揮して近世の藝苑にその地位を確保して來たのである。

第一函に陳列するは主として鎌倉期から足利期にかけての繪卷物類の殘缺で溫雅な濃彩のものあり瀟洒な白描法のものあり、或は靜かな貴族の生活を描き或は巷閭雜沓の樣を描き趣致とり〳〵であるが而かも皆大和繪固有の特色の存するところが窺はれやう。戯獸畫は鳥羽僧正の筆と喧傳せられる高山寺本から古く佚出した一片である。重家像順像は所謂歌仙切である。歌人の像にその歌を書き添へたもので此種の繪卷は鎌倉期歌合の流行と共に廣く行はれるやうになつたのである。狹衣物語は幕末まで一卷の体をなしてゐたが彰義隊の兵火で聊か下部を燒損し其後分散して今本館の外二三の諸家に分藏せられる。古畫殘缺はいかなる繪卷の斷片か明らかでないが前者と共に鎌倉期も末頃の製作であらう。源氏若紫圖もまた相近い頃のものであらうが惜むらく

は後世の補筆のあとが少くない。駿牛圖は外題に「御室小額筑紫牛」とあつてその名は駿牛繪詞に左中將實忠筆とあるものに相當するから蓋しその殘缺で鎌倉末季の作と思はれる。山王靈驗記は寂濟の筆と傳へられる山城蓮華寺の藏品の斷片と思はれるもので蓋し足利期に入つての製作である。打毬圖は畫風や風俗から見て足利期も末頃のもの、竹生島祭圖もまたその頃のものか、風俗研究の上からもなか〳〵に興味深いものである。第三函の前九年繪卷は詞書はないが圖中に義家貞任等の名があるからそれと察せられるもので南北朝頃の製作か。

第二函第四函に陳列するは德川時代に於ける大和畫作家の諸作品である。土佐光起は光則の子で左近衛將監、繪所預に補せられ久しく絶えてゐた土佐繪所を復興して當代に於ける此派の祖と仰がれる。光成はその子である。また光則の弟に如慶廣通があり住吉家を興しその子具慶廣澄相ついで土佐の本流と相並んで當代斯流の復興に預つて力があつた。具慶の孫廣守、廣守の養子廣行、廣行の子廣尙等いづれも此派の畫人として知られてゐる。而して廣守の門人廣當は別に板谷家をおこしその裔に桂舟弘延

光起光成筆　秋郊鳴鶉圖　本館藏

が出た。これら土佐住吉等の一流は皆古土佐の傳統を繼ぎつゝも自ら當代狩野等の畫風を參酌する所少くなかつたが、當代の末葉に至り直ちに鎌倉以前の高古な古土佐を復興せんとする一流が起つた。京に於ける冷泉爲恭の如きはその一人であり、江戸に於ける隆古の名も又逸することが出來ない。こゝに陳列する以上の諸作家の作品それぞれに特色の存するところを見るべく、また之を總觀するに此等高古優雅な大和繪の存在が當代繪畫史上淺からぬ意義の存することも思はれる。

爲恭筆　大江定基圖　本館藏

第一函

戲獸畫卷殘缺	紙本墨畫一幅	本館藏
太宰大貳重家像	紙本淡彩一幅	同
源順像	同	同
狹衣物語殘缺	紙本著色一幅	同

古繪卷殘缺　紙本着色一幅　本館藏
源氏若紫圖　同　同
駿牛圖　紙本淡彩一幅　同
山王靈驗記殘缺　紙本著色一幅　同
打毬圖　同　同
竹生島祭圖　同　同

第二函

清少納言圖　土佐光起筆　絹本著色一幅　本館藏
秋郊鳴鶉圖　土佐光起光成合作　同　同
源氏夕顔圖　住吉廣守筆　同　同
廣守廣行廣當像　住吉廣行廣尙筆　同　三幅　同
草花圖　板谷桂舟筆　同　二幅　同

閑居圖　高久隆古筆　紙本著色一幅　本館藏
大江定基圖　冷泉爲恭筆　同　同
源氏物語圖　春日光親筆　同　同

第三函

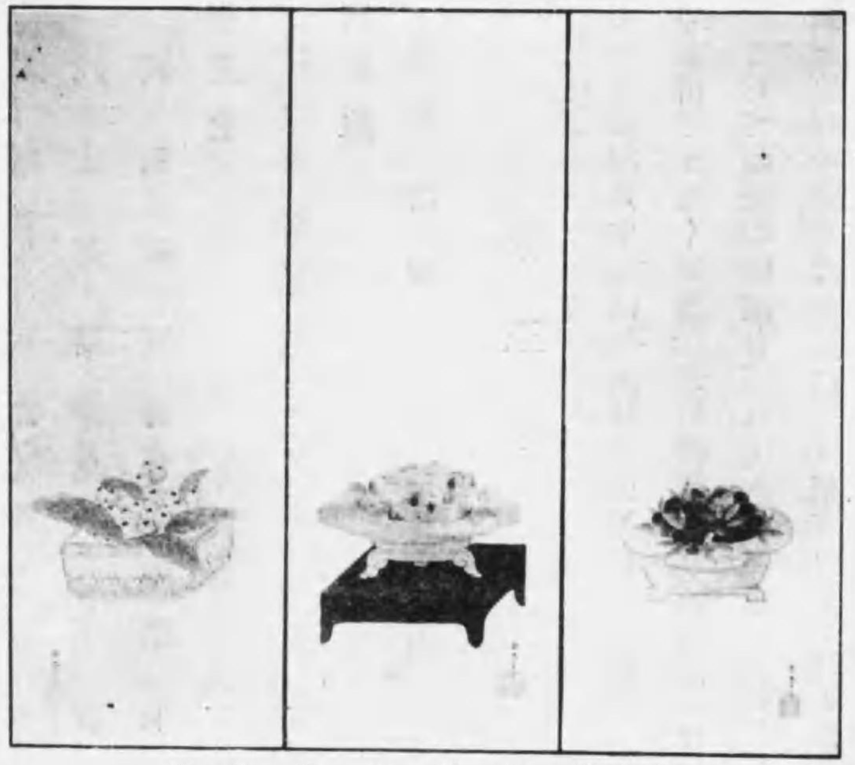
前九年合戰繪卷　紙本著色一卷　本館藏

第四函

橋姫物語繪卷　住吉具慶筆　紙本著色一卷　本館藏

第三室

この室に陳列するは德川時代に於ける狩野派諸家の作品である。當代の初頭に探幽齋守信出でゝ深く父祖以來の畫法と和漢先達の作風とを究めてこの派を大成し幕府の繪師として縱横の健腕を振ひ山水に花鳥に人物に行くとして可ならざるはなかつた。德川三百年の藝苑に此派ひとり搖ぎなき覇權を握るに至つたのも殆んど探幽の力に待



探幽筆　果實圖　本館藏

つものと言はれる。その老熟した筆致は牧童花鳥の三幅對にも見られるが果實圖の如きは宋畫の風を存し趣致の清雅なものとして珍重せられる。安信は探幽の季弟で狩野の本家をついで中橋家を興し、洞雲益信は初め探幽の養子となつたが後出でゝ駿河臺家の祖となつた。探幽の中弟尚信の木挽町家はその第四代に榮川古信、その子に榮川典信が出で、典信の子養川惟信、惟信の子伊川榮信等相次いで家風

を興隆し狩野の奥繪師中でも最も榮えるに至つた。是等の人々の諸作いづれも當代此派の作風を窺ふに足るべき好箇の作例である。西王母鶴圖の筆者秀信は蓋し柳雪秀信か、對月山水の筆者定信は古畫備考に狩野次郎右衛門定信、德庵正信弟とあるものに相當るも畫致寧ろ新しく、共に暫く疑を存して後考を待つことゝする。これら筆墨渾厚剛柔併せ備へた此一流の繪畫は當代の士風にも合して廣く世に行はれ京洛貴人の中にもこの派を學ぶ人を生じた。第三函に陳列する雜畫帖をものした天眞法親王は後西院天皇の第五皇子で、この畫帖の如きよく狩野一流の風格を傳へてゐる。第四函の扇面帖の筆者石山師香は京都の公卿で從二位中納言、畫は狩野永納に學んだ人である。

第一函

果實圖　探幽筆　絹本着色三幅　本館藏
中牧童左右花鳥圖　探幽筆　紙本墨畫三幅　同
中維摩左右花鳥圖　安信筆　絹本墨畫三幅　同
中布袋左右雁鶏圖　洞雲益信筆　紙本墨畫三幅　同

露光量違いの為重複撮影

313
6
675

昭和二年七月七日印刷
昭和二年七月九日發行　（定價金十錢）
東京帝室博物館
東京市芝區今入町二六
印刷者　鈴木安二
東京市芝區今入町二六
印刷所　鈴木印刷所

中琴高左右柳鷺蘆雁圖　榮川古信筆　絹本淡彩三幅　子爵綾田長利氏藏

第二函

鷹狩圖　榮川典信筆　絹本着色三幅　本館藏

中石橋山左右江ノ島蘆湖圖　養川惟信筆　同　同

中關羽左右山水圖　伊川榮信筆　同　同

中對月左右山水圖　定信筆　紙本墨畫三幅　同

中西王母左右鶴圖　秀信筆　絹本着色三幅　神谷傳兵衛氏藏

第三函

雜畫帖　天眞法親王御筆　絹本着色一帖　本館藏

第四函

源氏物語扇面帖　石山師香筆　紙本着色一帖　本館藏

露光量違いの為重複撮影

313
6
675

中琴高左右柳鷺蘆雁圖　榮川古信筆　絹本淡彩三幅　子爵織田長利氏藏

第二函

鷹狩圖　榮川典信筆　絹本着色三幅　本帝藏

中石橋山左右江島蘆湖圖　養川惟信筆　同　同

中關羽左右山水圖　伊川榮信筆　同　同

中對月左右山水圖　定信筆　紙本墨畫三幅　同

中西王母左右鶴圖　秀信筆　絹本着色三幅　神谷傳兵衛氏藏

第三函

維壽帖　天眞法親王御筆　絹本着色一帖　本館藏

第四函

源氏物語扇面帖　石山師香筆　紙本着色一帖　本館藏

昭和二年七月七日印刷
昭和二年七月九日發行　〔定價金十錢〕
東京帝室博物館
東京市芝區今入町二六
印刷者　鈴木安二
東京市芝區今入町二六
印刷所　鈴木印刷所

終